

私が録音で聞いたところ、島崎氏の所論では、日本の農家が収計をその農業所得だけで充足できるようにならなければならぬ、すべきである、ということになるよう私には思われる。農家のなかにはそのように考えて、経営を行なうものもあり、そうでない家もある。前者のような考えは昭和三〇～三五年頃から、農家の一部に支持されはじめたようである。このような考えが一部の農家に支持されたのか。そのような考えは自明のものであるとも、自然発生的なものであるとも思えない。

部落を構成する農家のすべてが右のような農業自立の考えをもつてゐるわけではないのに、農政や企業の働きかけに応じたり、逆に、働きかけたりするときに、やはり、「部落」の名において、全戸または多数の家を部落を単位とし、一戸、自立経営を前提とする協業体として組織しなければならないところに、部落と農家の大きな問題がある。「部落の空洞化」が事実であるかどうか十分確かめたことはないが、農家の関心を部落一本にまとめるることは相当にむずかしいのが、今日の状況ではある。相当数のものが離村して昭和二五年当時の三分の二の戸数となつた殆んどが專業農家からなる今日のルスツ村の諸部落においてすら、その様に感じられる。